

秦代の肉筆史料を素材とした作品について

高木茂行（聖雨）

Shigeyuki (Seiu) Takaki

書家は流行に敏感で、新しいものに目がない。ある時代、ある地域で流行する書風や書体があれば、その流れに乗らない書家はいない。新出土の資料があれば、その文字的、史的研究を進め、素材として扱えるようになればさまざま作品に応用する。現代においても同様である。作品における書体・書風史こそ、書の歴史の根元であると言え過ぎだろうか。

今作で用いた字は、戦国から秦代にかけての肉筆史料を基にしたものである。近年相次いで発掘される木・竹簡や帛書などの史料は、数も多くなり研究も進んでおり、多くの書家が作品に用いているので、さほど目新しい書体ではない。ただ作品にするとすると、ある程度の字例は必要となるので簡単ではない。やはり字例のないものは少なからずあり、それをどのように書くか、難しくはあるがこれが一つの楽しみでもある。当然、字義に従い、資料を基に作字せねばならないので、細心の注意が求められるのだが、表現について

は、現状答えがあるわけではないので、そういった意味で自由度は高い。

〈福〉は字例があるのでそれに従った。〈始〉は字例を確認できなかったため作字した。秦簡の肉筆史料の多くは、篆書を基盤としながら多分に行意を含み、早書きに適した字であるため、その特徴を活かすことに留意した。

〈福〉は、結体が比較的篆書に近いため、動きの大きい〈始〉と自然と調和させることが難しかった。この点は改善の余地がありそうである。

秦簡の字は漢字変遷の過渡期にあり、篆書、行草書、隸書の性質が混在し、書いていて非常に興味の尽きない書体である。最近いくつかこの書体を用いて作品を書いているが、少字数に留まっている。前記の難しさもあるが、多字数となると、作品として全体を調和させるのがなかなか難しいからである。今後の課題としたい。



福
始

34.2×45cm